

【短編・体験版】後輩ちゃんは女装させた僕を箱の中で可愛がる。

んっ…

いけないいけない。いつの間にか眠ってしまっていたようだ。

目を覚まして起き上がろうとすると、何やら女の子の息遣いがする。

…というより、僕の身体の上にその女の子がいるように感じる。

女の子の息遣い以外の音は全く聞こえる気配がない。

雰囲気から察するに、ここは箱の中のようだ。でも、一体なぜこんなことを？

落ち着いて目を開けようとする。

…が、どうやら目隠しをされているらしくその人物が何者なのかは確認できなかった。

では、少し身体を動かして現状を確認しよう…！？

身体が動かない。

いや、正確には逆さ海老縛りのような形で縛られているようで、僕の手足は綺麗に縄で繋がれてしまっているようだ。

「あっ、動き出しましたね…せんぱい♪ それじゃあ早速…えいつ。」

「はひいいいっ！！」

僕の身体にのしかかっている女の子が、僕の太もみを軽く撫でる。

目隠しで視界がなくなっているため、ただ触られただけなのにもものすごく過敏に反応してしまう。

ん？太もも？

男子学生の制服はズボンなのに、この女の子はどうしていきなり太ももに直接触れられたのだろうか。

...まさか、今着ている服も女子のそれになっているのか？

「...その声は、茜かい？」

「えへへ、そうですよ～。美術部の安立茜ですっ♪

以前からせんぱいのことが気に入っていたので、ちょっと乱暴ですが飲み物に薬を入れさせてもらって、ちょっと可愛くさせてもらいました。」

――安立茜。

美術部の期待の新入りであり、周囲からの評価も高く「後輩ちゃん」と呼ばれ親しまれている。しかし、「男子学生を女子の見た目にさせて快樂責めに遭わせる」という狂った性癖も持っており、どうやら今回は僕がその標的に選ばれてしまったらしい。

学校の食堂で一緒に飲み物を飲んだ時、その飲み物にいつの間にか薬を盛られていたらしく、意識が戻った時にはこの有様である。

...しかし、この現状で逃げ出すのはどう考えてもできなさそうだ。

仕方がない。大人しく彼女の遊びに付き合うしかないだろう。

「では、まず初めは...さわさわ...こちょこちょ...」

「ひっ...ひうっ！」

茜が最初に行ったのは、どうやら僕の弱点を探ることのようだ。

僕に着せられている制服のボタンを外し、身体中に手を伸ばし、まさぐる。

「かわいいおへそさんですね...ここはどうでしょうか？」

僕のへその穴に指を入れて、くりくりと優しくほじる茜。

「んっ！んんっ！」

くすぐったい。とにかくくすぐったい。

年下の女の子に変な声を出させられるなんて勘弁してくれ。

そう思い、僕は出来る限り声を出さないように抵抗する。

「我慢しなくてもいいんですよ？もっと素直になってください♪」

最後の締めで僕のへそをつんつん、と数回つつくと、茜は次の場所にくすぐり責めの標的を移す。

次はどこで何を仕掛けるつもりだ。

目隠しをされているこの状況では、当然ながら想像もつかない。

「んー。。じゃあ、次は...ここですね！」

茜の手が伸びる。

「んひゃああっ！ああっ！」

太ももの裏側を突然摘まれる。

お尻を触って来るのかと予想していたが、実際はその少し下を狙ってきたようだ。

あまりのくすぐったさに、身体が激しく飛び上がりそうになる。

...もちろん、茜が馬乗りになっているこの現状では無駄なあがきに過ぎない。

「えへへ...いい感じにとろけてきましたね？このあたりでそろそろ...ふふっ？」

「そろそろ、ってどういう...んん！！」

茜は突然、僕に不意打ちキスを食らわせてきたのだ。

——それも、舌まで入れて。

【サンプルはここまでとなります。】